

岡山県立

博物館だより

70号

- 館長室より …………… ②
- 博物館 NEWS …………… ③
- 企画展を終えて … ④⑤
- 学芸員ノート …………… ⑥
- 教育普及事業 …………… ⑦
- INFORMATION …………… ⑧



〈博物館講座スペシャルコースより〉

初回 稲田孝司氏「氷河時代の狩人と動物群」の様子



〈企画展より〉溜塗枝菊蒔絵曲水指



〈企画展より〉錦莞菟「桐輪廓鳳凰文」をみる

博物館法の改正とこれからの博物館

マスコミ等にはほとんど報道されなかったため、多くの皆様はご存じないと思いますが、先の通常国会で「博物館法」の改正が行われ、6月11日に公布・施行されました。法律は、「社会教育法」、「図書館法」及び「博物館法」のいわゆる社会教育3法をまとめて「社会教育法等の一部を改正する法律」の名称で国会に提出され、衆参の与野党が逆転するねじれ国会でも、さほど対決事項のないこの法案は、いくらかの附帯決議がありますが、すんなりと可決されたようです。

「博物館法」は、昭和26年に制定され、その後大きな改正もなく、約半世紀が経過しました。この間状況は大きく変化し、法律が現在の博物館活動や制度の実態に合っていないことから、(財)日本博物館協会など関係者の間からは、長年にわたり見直しの要望が出されていました。

文部科学省では、今般、教育基本法が改正されたことから、関係法令の改正に着手せざるを得ない状況もあり、平成18年9月に有識者からなる協力者会議を発足させ、平成19年6月には、報告書「新しい時代の博物館制度の在り方について」をまとめました。報告書には、博物館登録制度や学芸員養成制度の見直し、博物館を支援するための行政機関に変わる第三者機関の設置など、かなり大胆かつ広範囲にわたる提言が盛り込まれていました。

提言を受けた文部科学省では、中央教育審議会の生涯学習分科会で精力的な検討が行われたようですが、関係機関との意見調整や慎重な検討が必要であること(規制緩和や地方分権を進める総務省や学芸員養成課程を持つ大学などの反対)などから、提言の多くの項目が見送られ、改正の中身は、教育基本法の改正を踏まえた規定の整備(生涯学習の理念を入れる)や、同時に改正される「社会教育法」や「図書館法」との整合性や均衡(各法律の条文の文言をそろえる)を考慮した最低限の改正となってしまいました。法律は、昨年6月の報告書の内容からは、大きく後退し、期待を持っていた関係者の間では、肩すかしの感があり、「大山鳴動して・・・」など落胆の声もあがっています。

去る6月11日、ちょうど法律の施行日に東京で開催された「全国博物館長会議」で、文部科学省の担当者から法改正の概要について説明がありました。「法改正は不十分であり、今回の改正をきっかけとして検討を進め、時間をかけないでさらに改正を行いたい」と意気込みが示される一方、「国会審議の中で、衆議院では、社会教育法や図書館法については、活発な議論があったが、博物館法については一切質疑がなされなかった」という話も。「国会議員の関心がないことは、国民の興味や関心がないということ。ここ半世紀法律の改正がなかったのもわかる気がする」との自嘲気味の感想もありました。



学校教育との連携

今回の法改正は、重要法案でもなく、国民生活にとっても緊急性がないことから、マスコミがこの話題を取り上げることもなく、世論の後押しを得ることはできませんでした。また、本県でも今年度、県知事から、「財政危機宣言」がなされ、「公の施設の見直し」が行われ、県立博物館も見直しの対象として議論されました。今回の法改正を機会に、これからの博物館について、より多くの県民や博物館利用者から幅広い支持や支援が得られるよう、存在価値を高めるための実践に努めなければならないと考えています。

(館長 芦田和正)

新収蔵資料—須賀宏文氏収集資料—

須賀宏文氏(故人)が収集された資料のうち、平成18年度に「日本刀 太刀銘 長光」(国の重要文化財)を含む刀剣類を御寄贈していただきました。平成19年度には、「刀装具・根付・貨幣・硯」の収集品総数700点余りについても、出身地である岡山県で保存・活用して欲しいとして寄贈くださいました。

刀装具(鑿や目貫)と根付は、おもに江戸時代から現代にいたる貴重な作品が多く、また、貨幣には、奈良・平安時代の皇朝十二銭や中国で発行された五銖銭、大泉五十、貨泉などがふくまれており、今後の博物館活動に活用させていただきますと考えています。



鑿



根付

博物館講座スペシャルコースの開設



立石憲利氏の講座風景

当館学芸員が日頃の調査研究成果を紹介する博物館講座は、32年目を迎える歴史のある講座ですが、今年度から、新たに考古、歴史、民俗、美術工芸など各分野の第一線の研究者により学習を進める「スペシャルコース」を新設しました。今年度の講師は、稲田孝司氏(考古学)、立石憲利氏(民俗学)、伊勢崎淳氏(重要無形文化財保持者《備前焼》)、杉本史子氏(文献史学)の4名で、7月から10月まで毎月1回開催します。

(副館長 平井泰男)

資料紹介

雛巣釣花瓶 (正阿弥勝義作)

正阿弥勝義は、江戸時代末期の天保3(1832)年、津山藩の彫金師中川家に生まれました。父から金工技術を学び、18歳の時に備前岡山藩のお抱え職人正阿弥家を継ぎ、刀装具(鑿や鞘の飾り金具)を製作する彫金師となりました。明治9(1876)年の廃刀令後は、工芸品の製作にその活路を見いだします。

正阿弥勝義の作品の魅力は、その鋭い観察眼と高い金工技術に裏付けられた写実的で精密なところにあります。ここで紹介する雛巣釣花瓶は、勝義の60歳過ぎ(明治32(1899)年)の作品です。この作品は鶏の雛と藁の巣を題材とした釣花瓶で、実際には文鎮として用いるものです。よく観察すると、可愛らしい雛の毛並みの細かい描写をはじめとして、稲藁に残っていた籾粒が割れて中から米粒がのぞいている様子、家蜘蛛の足の毛の表現などが認められ、その精緻を極めた作品に驚かされます。勝義はどんな動物を彫金するにしても、必ず自分で飼育して観察したといわれています。そのこだわりが、完成度の高い作品を生みだし、日本のみならず世界からも認められたのです。

この作品は、11月から開催される岡山・香川合同企画文化交流展「備讃における工芸のあゆみ～幕末・明治から現代へ～」に出品される予定です。

(学芸員 河合 忍)



「流祖 200回忌記念 茶道速水流と岡山」

会期：平成20年4月10日（木）～5月11日（日）

わが国の文化の一つである茶道には実に様々な流派があります。数多い流派の中で岡山の地にゆかりの深い速水流が今年、流祖没後200年にあたります。これを記念して京都速水流家元、速水流社中の方々の御協力をいただき、このたびの展覧会を開催しました。流祖ゆかりの茶道具、家元所蔵の速水流の歴史を伝える書画、文書、道具からは流祖の茶に対する真髓が垣間見られ、茶の湯の文化に触れる好機となりました。



広報ポスター

写真は
溜塗枝菊蒔絵曲水指
茶室名「**滌源**」
流祖宗達坐像

本展では、江戸時代後期から息づく茶道の源流の一つである速水流の茶道の真髓と数々の茶道具に見る美を、約116点の展示作品から紹介しました。また、流祖200回忌記念として、図録も刊行されました。展覧会の期間中には5,616名の方々に御観覧いただきました。

展示の4つのテーマと展示構成

「第一部 速水流の起源と歴史」では、江戸時代後期からの流祖宗達より始まる茶道の流れや流祖宗達の人柄、また、皇室との密接な関係もあり、貴人への点前を基本とする速水流の起源を紹介しました。また、時の関白より賜った茶室名「**滌源**」は、茶道の本質を追究した流祖宗達の茶に対する理念があらわれる言葉として、現在でも家元邸に掲げられており、速水流の源を表しています。

「第二部 速水流と岡山」では、宗達が茶道の指南役として岡山藩に赴いたことから、岡山との関係を紹介するとともに、岡山藩士の人見家を通じて岡山ゆかりの茶道として根づいたことを、家元所蔵の掛軸や人見家に伝わる古文書などから紹介しました。

「第三部 茶の湯の歴史と茶道速水流」では、江戸時代に入り大衆化した茶道の乱れを案じ、本質に立ち返ろうと茶道を追究された流祖の著書を紹介し、その著書から茶道速水流の学術的

な側面を紹介しました。流祖は貴人用に様々な点前を考案しています。流祖が茶の湯の理念を説いた軸からは、高貴な雰囲気と共に茶の湯の哲学にも通じるような奥深い教えを感じ取ることができます。

「第四部 茶道具の美」では、茶入、茶杓、なつめ棗、香合、楽茶碗など、現在でも茶席に使われている様々な名品を御覧いただき、茶道具の美を紹介しました。流祖手作りの備前焼の茶入や歴代の家元の書付が残るお道具には茶の暖かみが感じられ、鑑賞されるお客様方もその美しさに感心されていました。特に中宮御所での献茶道具、貴人用の点前道具は華やかで、速水流の美を多くの皆様にお伝えできたのではないかと思います。



菊絵蛤香合

関連事業紹介—茶の湯の心を伝える—

本展では、京都家元の若宗匠に3回の展示解説をしていただき、毎回多くのお客様にお越しいただきました。また、茶の湯文化に親しんで



若宗匠による展示解説

いただけるように立礼式の茶席を設け、速水流の社中の方による点茶を実施しました。期間中に300名を超えるお客様が香のかおりに包まれた館内でお菓子と薄茶席を楽しまれました。

立礼式は机・椅子を使用する茶席です。会場では家元直筆の和歌が掛けられ、お客様は茶碗や棗、水指なども拝見されました。館内での茶席も風流なものがあり、速水流独特の点前や男性による点前など、一連の茶事の流れるような所作には多くの方々が魅了されました。(学芸員 鈴木力郎)



立礼式

「磯崎眠亀没後100年 蘭草の芸術 錦莞莚」

会期：平成20年7月31日（木）～8月31日（日）

キンカンエン、イソザキミンキって？

錦莞莚は、明治11(1878)年に、磯崎眠亀が発明した花莚（花ごぎ、花むしろ）です。かつて岡山県は、蘭草、蘭製品の主要産地で、中でも花莚は、明治時代中期以降わが国の重要輸出品でした。そのきっかけとなったのが錦莞莚です。特徴は目の細かさで、それまでの花莚は1尺（約30cm）に経糸約40本を使ったといわれますが、錦莞莚はその3倍以上を使い、精巧で緻密な模様を織り出すことに成功しました。錦莞莚は、その芸術性の高さや強靱さが国内外の博覧会で好評を得ましたが、主要輸出国であったアメリカ合衆国の関税引き上げ政策等のため、製作は明治30年代頃から減少し、昭和の初め頃には終わってしまいました。

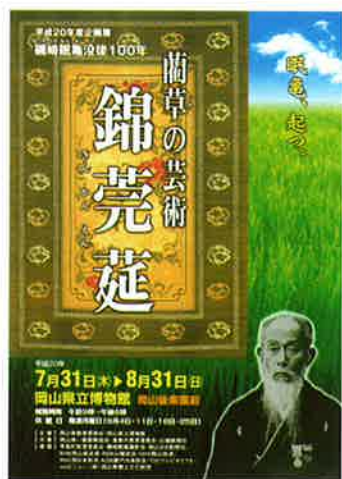


「錦莞莚 鋸歯文輪郭青海波文」の鋸歯文の部分

磯崎眠亀は、天保5(1834)年、現在の倉敷市茶屋町の小倉織を生業とする家に生まれました。失敗を繰り返しながらも錦莞莚を発明し、磯崎製莚所を設立して錦莞莚製造を軌道にのせる一方、製織技術の保護や社会福祉事業にも携わりました。永年の様々な功績が認められ、明治30(1897)年には緑綬褒章を受け、明治41(1908)年75歳でその生涯を終えました。

広報チラシ

現代まで受け継がれている錦莞莚の技と眠亀の心を現在も栽培されている倉敷市内の蘭草田を背景に、磯崎眠亀と牡丹唐獅子文の錦莞莚で表しました。



展示は4部構成で

「第一部 岡山と蘭草」では、月の輪古墳出土品（岡山県指定重要文化財）の大形鉄鎌束（蘭草状編物

附着）をはじめとして絵画、歴史資料等により、古墳時代から江戸時代の岡山の人々と蘭草との関わりについて紹介しました。「第二部 錦莞莚誕生」では、錦莞莚を織るために発明された錦莞莚織機(昭和53(1978)年に復元)や国内外で高く評価された数々の錦莞莚を紹介し、錦莞莚の技術と芸術性の高さを御覧いただきました。「第三部 磯崎眠亀ー錦莞莚の創始者ー」では眠亀ゆかりの品々から幕末・明治の動乱期に、寝食を忘れ困難を切り開いて錦莞莚を世に出し、特許法や商権擁護などにも影響を与えた磯崎眠亀の人物像に迫りました。「第四部 現代に生きる花ごぎ」では錦莞莚に影響を受けて誕生した様々な花莚や現在製作されている蘭製品、蘭草栽培について紹介しました。

夏休みは「けんぱく」へ

会期中に早島花ごぎ手織り技術保存会の御協力で、花ごぎの手織り実演（観覧者300名）や親子ミニ機手織り体験を行いました。ミニ機手織りの参加者140名はほとんどが初体験。「体験後に展示を見ると子どもがより興味を持っていた」という嬉しい感想も寄せられました。今年で3年目となるクイズラリーも好評で、子どもたちが展示物をじっくりと見るきっかけとなっています。また、今回は子ども向けキャプションも取り入れました。資料で特に注目してほしい点を分かりやすく短い文章で紹介しました。

眠亀に学ぶ

大正時代には尋常小学校読本に取り上げられた錦莞莚と磯崎眠亀ですが、業界や熱心に顕彰を続けておられる地元の方々以外には忘れられた存在でした。今展覧会には3,654名の方にお越しいただき、「錦莞莚」「磯崎眠亀」を多くの方に知っていただけたのではないかと思います。郷土の特産品である蘭草を使って、世界に誇れる製品を不屈の精神で生み出した眠亀から私たちが学ぶことは多いのではないのでしょうか。（学芸員 信江啓子）



ミニ機手織り体験

特別陳列 「閑谷学校関係資料－世界遺産登録をめざして－」

会期：平成 20 年 5 月 15 日（木）～6 月 8 日（日）

閑谷学校は岡山藩主池田光政が家臣の津田永忠に命じて整備させた、現存する日本最古の庶民のための学校です。閑谷学校の文庫には、教授資料や生徒の学習に用いられた書籍が多く保存されてきました。それら書籍のうち約4,000点と数点の絵画資料が平成14（2002）年に国の重要文化財に指定されています。また、昨年提案された世界遺産暫定リスト候補「近世岡山の文化・土木遺産群－岡山藩郡代津田永忠の事績－」の中にこれら本館所蔵の「閑谷学校関係資料」も含まれています。

このたび「閑谷学校関係資料」の中から代表的ものを展示するとともに、国宝閑谷学校講堂の附けたり指定となっています丸瓦など、関連の資料をあわせて展示し、閑谷学校と閑谷学校に関わる人々を紹介しました。世界遺産登録に向けて、近世岡山の文化・土木遺産群への関心が高まる中、当館においても、閑谷学校をはじめとする関連資料の発掘・研究を更に進め、展示をすることによって情報発信していく重要性を強く感じました。（学芸員 浅野慎太郎）



国指定重要文化財「閑谷学校関係資料」のうち閑谷学校図
文化11（1814）年
岡山県立博物館蔵

岡山藩士の鳥越烟村（梅圃）が閑谷学校教授役武元君立の依頼で描いたもの。平成18年度に修復を行い、今回修復後初めて公開しました。

特別陳列 大地からの便り 2008 - 県内の発掘調査報告展 -

会期：平成 20 年 7 月 31 日（木）～8 月 31 日（日）

7月31日から8月31日まで、当館及び岡山県古代吉備文化財センターが主催し、県内の発掘速報展として開催しました。

この事業は例年、センター主催の発掘調査報告会として、展示と合わせ一日で実施されてきましたが、本年度から両機関で連携を図り、資料の選定から調査や借用、パネルの作成、及び展示など協同で行う新しい試みを始めました。8月23日に本館講堂で行われた調査担当者による報告会には185名の方が参加され、熱心に聴講されていました。出土した考古資料については約1カ月、本館展示室で多くの方に御覧いただきました。

展示遺跡並びに主な展示資料は下表のとおりです。

（主幹 正木茂樹）

三輪遺跡群（総社市）	石器・縄文土器・弥生土器・ 緑釉陶器・灰釉陶器
勝負砂古墳（倉敷市）	鉄刀・砥石・土師器
婦本路古墳群・八塚古墳群（赤磐市）	大刀・須恵器
鬼城山（総社市）	瓦塔・須恵器
後楽園（岡山市）	鏝（かすがい）
安住院多宝塔（岡山市）	鎮壇具一式



教育普及事業の概要

本館においては、近年、教育普及事業について推進を図っています。平成20年度上半期の概要は次のとおりです。

博物館講座

県民一般を対象に、「岡山の歴史と文化」をテーマに行う講座で、本年度から「スタンダードコース」と「スペシャルコース」の二本立てにリニューアルしました。前者は、学芸員による博物館資料に基づいて学習する8講座で、6月に火曜・木曜班各70名が受講しました。後者は、各研究の第一人者である外部講師をお招きし、より専門的に学習する4講座で、7月～10月の月1回、各120名が受講中です。



	開催日	講師	テーマ	
スペシャルコース	7月6日(日)	福田孝司氏(岡山大名誉教授)	氷河時代の狩人と動物群	
	8月3日(日)	立石憲利氏(岡山民俗学会名誉理事長)	岡山の民話 -子どももわくわくする-	
	9月14日(日)	伊勢崎涼氏(重要無形文化財「備前焼」保持者)	備前焼の魅力	
	10月5日(日)	杉本史子氏(東京大学史料編纂所准教授)	近世の空間表現と岡山藩	
	開催日	講師	テーマ	
スタンダードコース	火曜日班	木曜日班		
	6月3日	6月5日	信江啓子(本館学芸員)	錦兜と襷袢取巻
			鈴木力郎(本館学芸員)	備前焼と茶道
	6月10日	6月12日	佐藤寛介(本館学芸員)	兜にみる武士の美意識
			正木茂樹(本館主幹)	考古学入門-古代吉備への誘い-
	6月17日	6月19日	浅野慎太郎(本館学芸員)	古文書からみる岡山の歴史
			河合 忍(本館学芸員)	土器から吉備の発生社会を読みとる
6月24日	6月26日	金田善敬(岡山県教育庁文化財課主任)	岡山県の会館の習俗	
		中田利枝子(岡山県立美術館主任学芸員)	カタリの美術	

学芸員解説

毎月第2・4土曜日の14時から、学芸員が展示解説を行っています。詳しくかつ分かりやすい説明に、今年度も毎回多くの方にお越しいただいています。

館内授業・出前授業

「館内授業」は当館で実物資料に触れたり展示を見たりするもので、「出前授業」は学芸員が直接学校に出向くものです。いずれも学校教育との連携事業として実施しており、今年度上半期も、前者を21校で、後者を2校で実施しています。



吉備の国歴史探検ツアー

本年度は、笠岡・新見・鏡野の3コースを設け、バスツアーで史跡等の散策と当館の見学を行います。6月27日には笠岡市立城見・陶山小学校6年生が倉敷市藤戸寺など「源平合戦ゆかりの地」を見学して当館を、7月11日には新見市立上市・菅生小学校5・6年生が吉備津神社を見学して当館を訪れました。



「歴史体験 よろいと小袖を着てみよう！」



5月5日には「歴史体験 よろいと小袖を着てみよう！」を実施しました。よろいに10組、小袖に8組の親子が参加され、実際に着用して本物の持つ質感や迫力などを感じてもらいました。

学芸員実習

8月4・5日、学芸員資格取得を目指す県内外の学生10名に、学芸員がそれぞれの専門分野に関わる実習を行いました。2日間の実習の後は博物館支援実習として、各自が3日間程度選択し、様々な行事や資料整理等に参加しました。

(主幹 正木茂樹)

